

平成31（令和元）年度（2019）

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター一年報

令和2年7月

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

平成31（令和元）年度
花・野菜技術センター年報
目 次

I 総 説

1. 沿 革	1
2. 位置および土壌	2
3. 用地および利用区分	2
4. 機 構	2
5. 職 員	3
6. 収入支出決算額	4
7. 建 物	5
8. 施設および備品	6

II 作 況

1. 気象概要	7
2. 野菜類の生育状況	7

III 事業の推進方向と成果の概要

1. 研究部	10
2. 技術普及室	12

IV 試験研究および地域支援等活動の課題名

1. 花き野菜に関する試験	13
2. 栽培環境に関する試験	14
3. 病害虫に関する試験	15
4. 地域支援に関する試験等	16

V 研修事業の概要

1. 概要	17
2. 研修事業の推進	17
3. 北海道花き・野菜技術研修	18
4. 研修ほ場等作付概要	21

VI 研究発表並びに普及事項

1. 研究報告・資料	22
2. 印刷刊行物	23
3. 普及事項	23

VII その他

1. 職員の研修	24
2. 見学・参観	24
3. 研修生の受入れ（研修事業以外）	25
4. 委員会活動	25
5. 公開デー2019の実施	26
6. 講師等の派遣	27
7. 各種委員	27

VIII 自己点検への対応

自己点検への対応	28
----------	----

I 総 説

1. 沿革

(1) 設立の趣旨と経過

当センターは、本道農業の戦略作物である花き・野菜生産の一層の振興を図るため、試験研究部門とその技術を普及する部門を一体化し、相互の連携の下に総合的な機能を果たす拠点施設として、平成8年度に設立された。

試験研究では、北海道立総合研究機構の農業試験場における花き・野菜の中核的研究機関として、関係場との分担を図りながら、新品種の開発、栽培技術および流通技術等に関する試験を効率的に推進し、また、技術普及・研修では、開発された新技術を重点的かつ効率的に普及指導し、地域への定着を図るとともに、生産者や指導者等に対する技術指導はもとより、「開かれた試験場」として、一般消費者をも対象とした啓発研修を行うとしている。

平成4年度に調査費、同5年度には設計費が予算化された。平成6年度より道立滝川畜産試験場内に研究棟などの建設、ほ場の整備が開始され、同7年度には付属施設、研修寮、温室などすべての施設の建設と備品の納入も完了した。一部、幹線などの舗装工事、外構工事等を平成8年度に残したが、同年3月には「北海道立農業試験場条例」を改正、4月に職員が配置され、業務を開始した。8月30日には、北海道知事、滝川市長、農業団体など関係者を迎え、開所式を開催した。平成9年度より本格的に試験研究、研修などを開始、平成10年度以降もハウスの移転、新設など環境の整備が進み、着実に成果をあげている。

(2) 組織機構の変遷

平成8年4月に場長以下、総務部、研究部、専門技術員室の2部1室体制でスタートしたが、場長および研修主査を除く総務部は隣接する滝川畜産試験場との兼務体制であった。

平成12年4月、道立畜産試験場の再編に伴い、場長以下、総務部の兼務体制が解かれ、専任の体制となった。

また、道立農業試験場の機構改革により、専門技術員室は発展的に解消し、技術普及部が新設さ

れ、技術普及体制の強化が図られた。

平成22年4月、22道立試験研究機関を統合し創設された地方独立行政法人北海道立総合研究機構の農業研究本部の一員として、3グループからなる研究部と総務課の体制で再スタートし、道所属の普及指導員が駐在する技術普及室が設置された。

(3) 試験研究体制と推進方向

研究部は、平成8年度は花き2科、野菜2科、土壌肥料科、病虫科の6科体制であったが、平成12年度に花き科、野菜科、園芸環境科、病虫科の4科体制となった。平成18年度には園芸環境科を栽培環境科と改称した。平成22年度からは、旧花き科・野菜科を統合した花き野菜グループ、旧栽培環境科・病虫科からなる生産環境グループに加えて、旧技術普及部の研修・地域対応と旧総務部管理科機能を併せた技術研修グループからなる3グループ体制となった。

当センターは、花き・野菜に関する試験研究を行う専門場に位置づけられ、品種・栽培部門と栽培環境・病害虫の環境部門が一体化した総合的な試験研究を効率的に推進することが期待されている。

また、花き・野菜の試験研究の中核的機関として、農業研究本部、各場との連携の下に花き・野菜に関する試験研究の企画調整や地域対応研究も担っている。

(4) 研修体制および技術普及と推進方向

当センターにおける重要な業務として、試験研究とともに技術研修と技術普及がある。

技術研修は、試験研究で開発または体系化された新技術の生産現場への速やかで効率的な伝達普及を目的として、農業技術指導者、中核的農業者などを対象に実施している。長期的な専門研修から市民セミナーまで幅広い研修内容となっており、研究員と普及指導員、各農試の協力のほか、外部講師を招き指導している。研修事業に対応した研修寮、技術研修室、研修用ほ場・温室が整備されるとともに、研修担当者が配置され平成8年

度の準備期間を経て、平成9年度から本格的に研修事業を開始した。平成12年度に研修業務が総務部から新設の技術普及部に移管し、さらに、平成22年度には研修事業と技術支援、旧管理科業務を担う技術研修グループが新設され研究部にこれら業務が移管することとなった。

そのほか、当センターには開放実験室、展示温室、展示ほ場も設置され、農業関係者ばかりでなく、一般道民にも「開かれた試験場」として利用できる試験研究機関を目指している。

普及部門は、平成8年度より専門技術員室（滝川専技室）が設置され、普及支援活動や技術相談の機能を果たしてきたが、平成12年度に専門技術員と研究職員および研修担当者からなる技術普及部が新設され、普及・技術支援・研修に対応してきた。さらに、研究部と技術普及部で組織された技術体系化チームによる新技術の普及推進体制が整えられた。平成18年には農業改良助長法の改正により、専門技術員が普及指導員へ一元化されるとともに道立農試機構改正による技術普及部の体制も変更した。

また、平成22年度より、独法化による技術普及部の廃止にともない技術普及室が新設され、道所属の普及指導員が駐在して普及業務を担っている。

2. 位置および土壌

滝川市東滝川735番地

北緯43° 35′ 東経141° 59′

滝川市街より空知川に沿って東北に約8km、JR根室本線東滝川駅より約1kmにある。中央バス滝川ターミナルより赤平芦別方面行きバスに約13分間乗車し、花・野菜技術センター入口で下車、徒歩15分（約1km）。道央自動車道滝川インターチェンジより国道38号線を経由し車で5～6分。

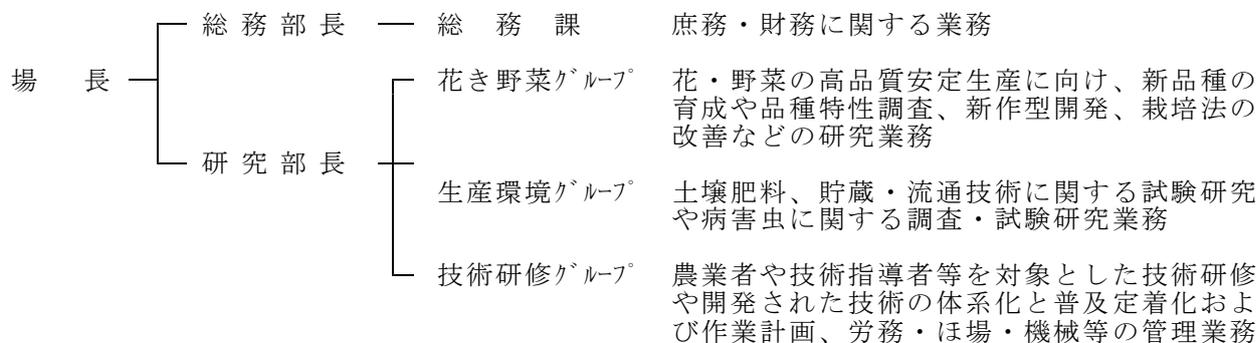
本センターは洪積台地（地形は低位段丘、平坦～緩傾斜）にあり、土壌の種類は細粒灰色台地土（暗色表層疑似グライ土）である。しかし、圃場整備により、作土層（40cm）は旧表土22cmに砂質軽石流堆積物を18cm客土、混和している。

ハウス圃場は酸性褐色森林土の客入土にバーク堆肥、土壌改良資材（炭カル）を投入し、改良した。平成9年、さらに砂質軽石流堆積物15cm程度を客土、混和した。

3. 用地および利用区分

総面積	51.8ha
建物敷地	19.2ha
庁舎	10.2ha
調査棟・温室	3.7ha
機械庫その他	5.3ha
畑	31.0ha
試験・展示・研修圃場	26.7ha
ハウス・枠圃場	4.3ha
道路用地	1.6ha

4. 機 構 （令和2年3月31日現在）



花・野菜技術センター技術普及室*

上席普及指導員 — 主任普及指導員

普及センター等への支援、専門技術の調査研究
（* 所属：北海道農政部生産振興局技術普及課）

5. 職 員

(1) 職員数 (令和2年3月31日現在)

区 分	場 長	部 長	総 務 課	花き野菜G	生産環境G	技術研修G	計
研究 (プロパー)		1		7	7	2	17
研究支援 (プロパー)			1			4	5
研究支援 (道派遣)	1	1	3			2	7
計	1	2	(兼務1外数) 4	7	7	8	29

(2) 現職員名簿 (令和2年3月31日現在)

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名	
総務部	場 長	桑 名 真 人	生産環境G	研 究 主 査	田 丸 浩 幸	
	総 務 部 長	杉 山 善 康	〃	研 究 主 査	野 田 智 昭	
	総 務 課	総務課長(兼)	〃	主 査 (病 虫)	佐々木 純	
	〃	主 査 (総 務)	〃	研 究 主 任	藤 根 統	
	〃	主 査 (調 整)	〃	専 門 研 究 員	柿 崎 昌 志	
	〃	主 任	岩 橋 広 樹	技術研修G	研 究 主 幹	鳥 越 昌 隆
研究部	技 師	高 崎 真 梨 奈	〃	主 査 (技 術 研 修)	植 野 玲 一 郎	
	研 究 部 長	三 好 智 明	〃	主 査 (研 修)	山 井 雅 之	
	花き野菜G	研 究 主 幹	〃	専 門 主 任	高 橋 英 樹	
	〃	主 査 (花 き)	〃	〃	北 和 宏	
	〃	主 査 (野 菜)	〃	〃	寺 口 佳 孝	
	〃	主 査 (施 設)	〃	主 任	玉 川 忠	
	〃	研 究 主 任	木 村 文 彦	〃	〃	南 貴 夫
	〃	研 究 主 任	江 原 清	(道技術普及室)	上 席 普 及 指 導 員	宮 町 良 治
	〃	研 究 職 員	柏 谷 太 亮		主 任 普 及 指 導 員	鹿 野 理
	生産環境G	研 究 主 幹	美 濃 健 一	〃		
〃	主 査 (栽 培 環 境)	上 野 達				

(3) 転入・採用

職 名	氏 名	採用転入年月日	備 考
総務部 総務部長	杉 山 善 康	31. 4. 1	道農政部技術普及課
総務部総務課 技師	高 崎 真 利 奈	31. 4. 1	道釧路総合振興局農務課
研究部 研究部長	三 好 智 明	31. 4. 1	十勝農試研究部大豆G
研究部生産環境G 主査(栽培環境)	上 野 達	31. 4. 1	総務部原子力環境センター農業研究科
研究部生産環境G 研究主任	藤 根 統	31. 4. 1	上川農試研究部生産環境G
研究部生産環境G 専門研究員	柿 崎 昌 志	31. 4. 1	中央農試研究部予察診断

(4) 転出・退職

職 名	氏 名	転出退職年月日	備 考
総務部 総務部長	高 林 仁 和	3 1 . 3 . 3 1	定年退職
総務部総務課 主任 (再)	土 田 操	3 1 . 3 . 3 1	再任用の任期满了による退職
研究部 研究部長	川 岸 康 司	3 1 . 3 . 3 1	定年退職
研究部 花き野菜G 主査 (野菜)	黒 島 学	3 1 . 3 . 3 1	農業研究本部企画調整部地域技術G
研究部 栽培環境G 主査 (栽培環境)	後 藤 英 次	3 1 . 3 . 3 1	中央農試生産研究部水田農業G
研究部 栽培環境G 研究主査	白 井 佳 代	3 1 . 3 . 3 1	十勝農試研究部生産環境G
研究部 技術研修G 主任	及 川 忠	3 1 . 3 . 3 1	再任用の任期满了による退職
研究部 技術研修G 専門主任	南 貴 夫	3 1 . 3 . 3 1	定年退職、技術研修G 主任 (再)

6. 収入支出決算額

(1) 収入決算額

(単位：円)

科 目	決 算 額
技術普及指導手数料	203,950
農産物売払収入	20,969
(うち花・野菜技術センター分)	(20,969)
畜産物売払収入	0
不用品売払収入	0
法人財産使用料等	345,319
その他雑収入	0
共同研究費負担金	1,000,000
国庫受託研究収入	0
道受託研究収入	2,029,672
その他受託研究収入	11,440,123
施設整備費補助金収入	13,970,000
計	29,010,033

※事業費支弁人件費振替額を含まない

(2) 支出決算額

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	繰 越 額	残 額
戦略研究費	1,800,000	1,800,000	0	0
重点研究費	9,200,000	9,200,000	0	0
職員研究奨励費	0	0	0	0
経常研究費	10,025,000	9,640,495	0	384,505
研究開発推進費	0	0	0	0
技術普及指導費	5,678,950	5,678,642	0	308
研究用備品整備費(積立金)	12,012,000	12,012,000	0	0
維持管理経費(研究)	1,035,000	1,035,000	0	0
維持管理経費	80,113,000	78,293,965	0	1,819,035
運営経費	48,693,820	47,963,542	0	730,278
共同研究費	1,000,000	1,000,000	0	0
国庫受託研究費	0	0	0	0
道受託研究費	2,030,000	2,029,672	0	328

その他受託研究費	11,441,000	11,438,119	0	2,881
施設整備費補助金	13,970,000	13,970,000	0	0
施設整備費（繰越積立金）	18,337,000	18,337,000	0	0
計	215,335,770	212,398,435	0	2,937,335

※事業費支弁人件費振替額を除く

7. 建 物

(1) 現有（令和2年3月31日現在）

名 称	構 造	面 積
事務庁舎	レンガ造2階	449.86 m ²
総合研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	721.36
農機具格納庫	木造平屋	233.00
総務課第2車庫	〃	43.74
庁舎2号物置	〃	49.58
第2運動器具庫	〃	24.79
運動具庫	〃	5.04
管理科油類格納庫	ブロック造平屋	5.69
管理科職員詰所	木造平屋	106.92
機材庫	鉄骨平屋	1,033.46
農業機械格納庫	〃	569.16
総合車庫	〃	187.20
花・野菜技術センター研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	2,104.73
展示温室	鉄骨平屋	118.87
研修宿泊棟	鉄筋コンクリート2階	1,205.84
花き・野菜調査棟	鉄骨平屋	384.00
病虫・土壌作物調査棟	〃	390.00
保鮮実験棟	〃	232.80
花き・野菜詰所	〃	141.62
床土置場・土詰播種作業棟	〃	553.80
農機具格納庫・車庫棟	〃	659.34
電気室棟	〃	66.30
花き温室－1	〃	166.00
〃－2	〃	166.00
〃－3	〃	166.00
野菜温室－1	〃	166.00
〃－2	〃	166.00
〃－3	〃	166.00
病虫温室	〃	166.00
土肥温室	〃	166.00
研修温室－1	〃	290.25
〃－2	〃	290.25
環境制御温室－1	〃	166.00
〃－2	〃	166.00
人工気象室	〃	80.18
ミスト室	〃	164.20
参観者トイレ	〃	37.96

< 続き >

名 称	構 造	面 積 (㎡)
来園者トイレ	鉄筋コンクリート平屋	29.25
総務課倉庫	木造平屋	43.74
圃場避難棟-1	〃	29.16
〃 -2	〃	29.16
総務課物置3	木造平屋	26.46
〃 4	〃	26.46
〃 5	〃	14.87
第2研修寮	ブロック造平屋	122.50
第2研修寮物置	木造平屋	9.93
第2堆肥舎	鉄筋コンクリート平屋	128.00

8. 施設および備品

(1) 新たに設置した施設

名 称	構 造	数量	新設年月日	価 格	摘 要
なし					

(2) 新たに購入した備品 (50万円以上)

品 名	数量	規格および型式	金 額	配 置
トラクター	1	ヤンマーアグリジャパン(株) YT5113A DYUQW	12,012,000	技術研修G
大判プリンター	1	キャノン(株) TX-4000MFP	1,042,250	技術研修G
農作業用機械	1	アトム農機 ソイル克蘭ブラNVAA7	1,100,000	技術研修G

Ⅱ 作 況

1. 気象概要

(1) 冬期間の経過

冬期間（11月～3月）の平均気温は11月上～中旬と2月下旬～3月中旬に高かった。降水量は11月にやや多かったが、それ以降は平年並に推移した。日照時間は3月上旬に多く、11月中旬、2月上旬および3月下旬に少なかったが、その他は平年並であった。

(2) 農耕期間の経過

農耕期間（5月から9月）の平均気温は5月中～下旬にやや高かったが、その他は平年並であった。農耕期間の積算気温は2797℃で平年の102%であった。

降水量は6月～7月に少なく、8月上旬に極めて多かった。農耕期間を通しての積算降水量は616mmで平年の107%であった。

日照時間は7月中旬～8月下旬に少なく、5月中旬に多かった。農耕期間を通しての積算日照時間は888時間で平年の105%であった。

本年の農耕期間の気象は、気温は平年並で、降水量はやや多く、日照時間はやや多かった。

(3) 月別の経過

4月：平均気温は中旬に高かった。降水量は上旬と下旬にやや少なかった。日照時間はやや多く、特に中旬に多かった。

5月：平均気温は中～下旬に高かった。降水量は中旬に少なかったが、月全体では平年並であった。日照時間は中旬に多かった。

6月：平均気温は平年並で、降水量は少なかった。日照時間は上～中旬にやや多かった。

7月：平均気温は平年並であった。降水量は月を通じて少なかったが、日照時間は中～下旬に少なかった。

8月：平均気温は平年並であった。降水量は上旬に極めて多かった。日照時間は中～下旬に

やや少なかった。

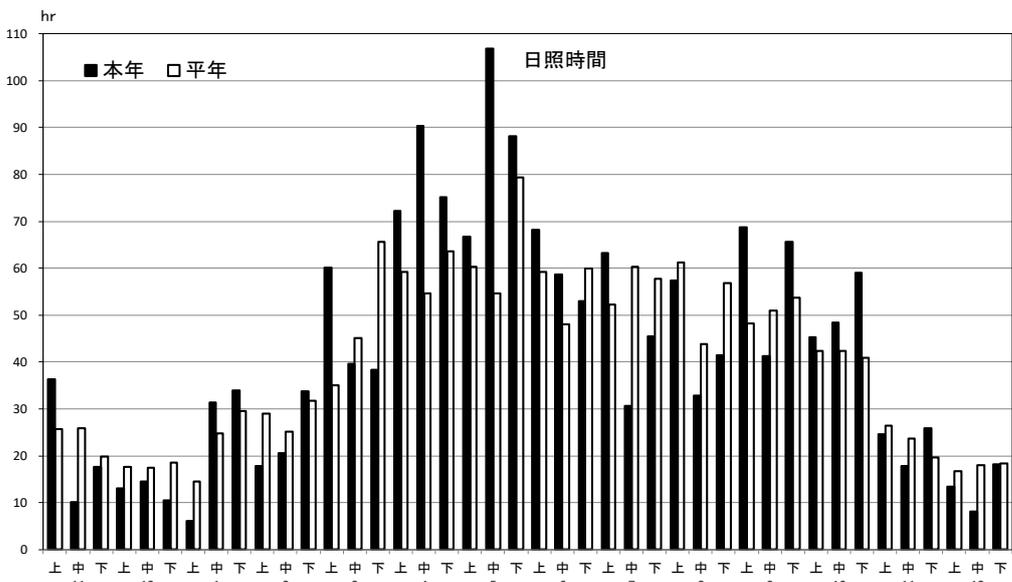
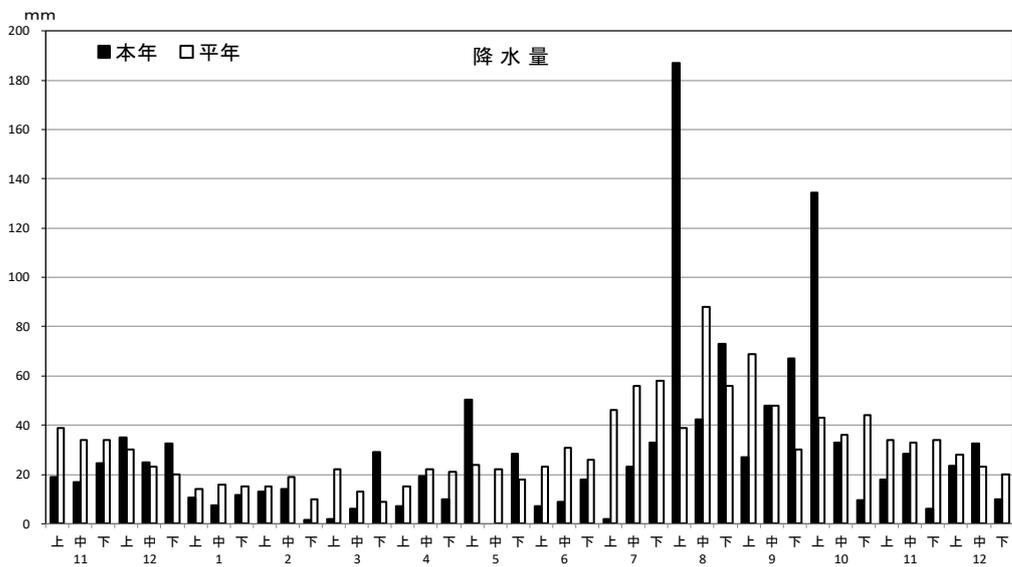
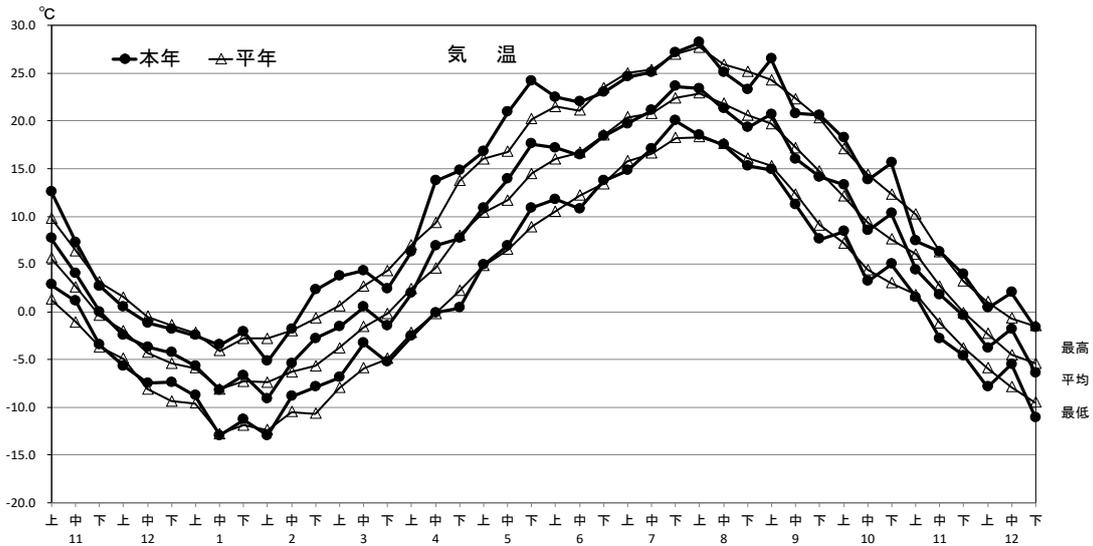
9月：平均気温は平年並であった。降水量は上旬に少なく下旬に多かった。日照時間は上旬にやや多かった。

10月：平均気温は下旬に高かった。降水量は上旬に多く、下旬にやや少なかった。日照時間は下旬にやや多かった。

2. 野菜類の生育状況

(1) いちご（対象品種：「けんたろう」）

平成30年8月22日定植の無加温半促成作型で土耕栽培した。定植後の平均気温は、8月下旬と9月中旬にやや低く、10月上旬にやや高く、10月下旬に高かった。ハウス天井フィルムを被覆した2月27日の積雪深は平年より約1割少なく、「けんたろう」の開花始期は4月16日で平年より2日早かった。4月中旬の平均気温が平年より2.3℃高く、日照時間も35.7時間多かった。また、5月中旬の平均気温が平年より2.2℃高く、日照時間も52.2時間多かった。このため、収穫始期は5月16日となり、平年より6日早かった。5月下旬は平年より平均気温が3.1℃高く、5月下旬から6月中旬までの日照時間が平年より28.5時間多かった。このため、規格内一果重は12.7gで平年よりやや小さかったが、規格内収穫果数は167千個/10aで平年より11%多かった。この結果、「けんたろう」の総収量は3066kg/10aのやや多収、規格内収量も2128kg/10aで平年より8%多かった。Brix（屈折計示度）9.4%で平年並みであった。



平成31年度 滝川気象図

気象表 (平成30年11月～令和1年12月)

年	月	旬	平均気温 (°C)			最高气温 (°C)			最低气温 (°C)			降水量 (mm)			降水日数 (日)			日照時間 (時間)			
			本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
H30	11	上	7.7	5.6	2.1	12.6	9.8	2.8	2.8	1.3	1.5	19	39	△ 20	4	6	△ 2	36.4	25.7	10.7	
		中	4.0	2.6	1.4	7.3	6.4	0.9	1.1	-1.1	2.2	17	34	△ 17	4	6	△ 2	10.1	25.8	△ 15.7	
		下	0.0	-0.4	0.4	2.7	3.1	△ 0.4	-3.5	-3.7	0.2	25	34	△ 10	10	6	4	17.7	19.8	△ 2.1	
	12	上	-2.5	-2.0	△ 0.5	0.5	1.5	△ 1.0	-5.7	-4.9	△ 0.8	35	30	5	6	6	0	13.1	17.7	△ 4.6	
		中	-3.7	-4.3	0.6	-1.2	-0.5	△ 0.7	-7.5	-8.1	0.6	25	23	2	6	6	0	14.6	17.5	△ 2.9	
		下	-4.3	-5.4	1.1	-1.8	-1.4	△ 0.4	-7.4	-9.4	2.0	33	20	13	9	6	3	10.4	18.5	△ 8.1	
	H31	1	上	-5.7	-5.9	0.2	-2.5	-2.2	△ 0.3	-8.8	-9.6	0.8	11	14	△ 4	9	5	4	6.0	14.5	△ 8.5
			中	-8.2	-8.1	△ 0.1	-3.5	-4.1	0.6	-13.0	-12.8	△ 0.2	8	16	△ 9	6	5	1	31.4	24.7	6.7
			下	-6.7	-7.3	0.6	-2.1	-2.8	0.7	-11.3	-11.9	0.6	12	15	△ 4	5	6	△ 1	33.9	29.5	4.4
2		上	-9.1	-7.4	△ 1.7	-5.2	-2.8	△ 2.4	-13.0	-12.4	△ 0.6	13	15	△ 2	9	5	4	17.8	29.0	△ 11.2	
		中	-5.4	-6.3	0.9	-1.8	-2.0	0.2	-8.9	-10.5	1.6	14	19	△ 5	9	6	3	20.5	25.2	△ 4.7	
		下	-2.8	-5.7	2.9	2.3	-0.7	3.0	-7.9	-10.7	2.8	2	10	△ 9	2	4	△ 2	33.8	31.7	2.1	
3		上	-1.6	-3.8	2.2	3.7	0.6	3.1	-6.9	-8.0	1.1	2	22	△ 20	2	5	△ 3	60.2	35.1	25.1	
		中	0.5	-1.6	2.1	4.3	2.7	1.6	-3.3	-5.9	2.6	6	13	△ 7	4	3	1	39.6	45.2	△ 5.6	
		下	-1.5	-0.2	△ 1.3	2.4	4.3	△ 1.9	-5.3	-4.9	△ 0.4	29	9	20	9	3	6	38.3	65.7	△ 27.4	
H31	4	上	1.9	2.4	△ 0.5	6.3	7.0	△ 0.7	-2.6	-2.2	△ 0.4	7	15	△ 8	5	4	1	72.2	59.3	12.9	
		中	6.9	4.6	2.3	13.7	9.3	4.4	-0.1	-0.2	0.1	20	22	△ 3	2	4	△ 2	90.4	54.7	35.7	
		下	7.7	8.0	△ 0.3	14.8	13.7	1.1	0.4	2.2	△ 1.8	10	21	△ 11	3	4	△ 1	75.1	63.7	11.4	
	5	上	10.9	10.4	0.5	16.8	16.0	0.8	4.9	4.8	0.1	51	24	27	6	4	2	66.7	60.4	6.3	
		中	13.9	11.7	2.2	20.9	16.8	4.1	6.9	6.5	0.4	0	22	△ 22	0	3	△ 3	106.8	54.6	52.2	
		下	17.6	14.5	3.1	24.2	20.2	4.0	10.9	8.9	2.0	29	18	11	3	3	0	88.2	79.3	8.9	
	6	上	17.2	16.0	1.2	22.5	21.5	1.0	11.8	10.5	1.3	7	23	△ 16	5	4	1	68.2	59.2	9.0	
		中	16.4	16.7	△ 0.3	22.0	21.1	0.9	10.8	12.2	△ 1.4	9	31	△ 22	3	4	△ 1	58.6	48.0	10.6	
		下	18.4	18.5	△ 0.1	23.0	23.5	△ 0.5	13.7	13.4	0.3	18	26	△ 8	2	2	0	53.0	59.9	△ 6.9	
7	上	19.7	20.4	△ 0.7	24.6	25.0	△ 0.4	14.8	15.8	△ 1.0	2	46	△ 44	3	4	△ 1	63.3	52.3	11.0		
	中	21.1	20.8	0.3	25.1	25.4	△ 0.3	17.1	16.6	0.5	23	56	△ 33	4	3	1	30.7	60.4	△ 29.7		
	下	23.6	22.4	1.2	27.2	27.0	0.2	20.0	18.2	1.8	33	58	△ 25	3	3	0	45.4	57.8	△ 12.4		
8	上	23.4	22.9	0.5	28.2	27.7	0.5	18.5	18.3	0.2	187	39	148	5	3	2	57.3	61.2	△ 3.9		
	中	21.3	21.8	△ 0.5	25.1	25.9	△ 0.8	17.5	17.6	△ 0.1	43	88	△ 46	4	5	△ 1	32.9	43.8	△ 10.9		
	下	19.3	20.6	△ 1.3	23.3	25.2	△ 1.9	15.3	16.1	△ 0.8	73	56	17	7	5	2	41.5	56.9	△ 15.4		
9	上	20.7	19.7	1.0	26.5	24.3	2.2	14.9	15.3	△ 0.4	27	69	△ 42	3	4	△ 1	68.7	48.2	20.5		
	中	16.0	17.2	△ 1.2	20.8	22.3	△ 1.5	11.2	12.3	△ 1.1	48	48	0	6	5	1	41.2	50.9	△ 9.7		
	下	14.1	14.7	△ 0.6	20.6	20.3	0.3	7.6	9.1	△ 1.5	67	30	37	1	4	△ 3	65.7	53.7	12.0		
10	上	13.3	12.1	1.2	18.2	17.1	1.1	8.4	7.2	1.2	135	43	92	3	5	△ 2	45.3	42.4	2.9		
	中	8.5	9.4	△ 0.9	13.8	14.4	△ 0.6	3.2	4.4	△ 1.2	33	36	△ 3	4	6	△ 2	48.4	42.3	6.1		
	下	10.3	7.6	2.7	15.6	12.3	3.3	5.0	3.0	2.0	10	44	△ 35	4	5	△ 1	59.1	40.9	18.2		
11	上	4.4	6.0	△ 1.6	7.4	10.2	△ 2.8	1.5	1.8	△ 0.3	18	34	△ 16	6	5	1	24.5	26.5	△ 2.0		
	中	1.8	2.7	△ 0.9	6.3	6.3	0.0	-2.8	-1.2	△ 1.6	29	33	△ 5	8	6	2	17.8	23.7	△ 5.9		
	下	-0.4	-0.1	△ 0.3	3.9	3.2	0.7	-4.6	-3.8	△ 0.8	6	34	△ 28	3	6	△ 3	25.8	19.6	6.2		
12	上	-3.8	-2.3	△ 1.5	0.4	1.0	△ 0.6	-7.9	-5.9	△ 2.0	24	28	△ 5	9	6	3	13.5	16.7	△ 3.2		
	中	-1.8	-4.5	2.7	2.0	-0.7	2.7	-5.5	-7.9	2.4	33	23	10	8	6	2	8.1	18.0	△ 9.9		
	下	-6.4	-5.4	△ 1.0	-1.7	-1.5	△ 0.2	-11.1	-9.5	△ 1.6	10	20	△ 10	6	6	0	18.1	18.3	△ 0.2		
5~9月積算			2797.4	2738.8	58.6	3582.3	3491.9	90.4	2904.0	2003.8	0.2	616	575	41	55	56	△ 1	888.2	846.6	41.6	
平年比 (%)			102.1			102.6			100.0			107.0			98.2			104.9			

注1 滝川地域気象観測所のAMeDAS観測値。 注2 日照時間は太陽電池式(新型)による。 注3 平年値は前10カ年の平均値。 注4 △印は減を示す。

Ⅲ 事業の推進方向と成果の概要

1. 研究部

(1) 花き野菜グループに関する試験

花きでは、切り花の出荷調整および品質管理に関する試験を実施する。野菜では、いちごの新品種育成、野菜の品種特性調査および栽培法改善試験を実施する。花きと野菜に共通して施設栽培の環境制御にかかる試験を実施する。花きおよび野菜ともに、技術研修Gの技術研修を分担する。

①「高温期の道外移出に対応した一年生切り花の品質管理技術」では、スカビオサやマトリカリア等5品目について、高温期の道外移出のための輸送技術を開発した。

②「いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性新品種の育成」では、春どり栽培用に「ゆきララ」並の果実品質を有する多収性いちご品種を育成することを目標に、交配および育成系統の選抜を行った。「26交19-9」を「空知交39号」の系統名を付して生産力検定および地域適応性検定試験に供試することとした。「空知38号」は継続検討、「空知37号」は検定を中止した。系統選抜では「27交1-131」、「27交7-21」および「27交9-1」の検定を中止し、「27交12-123」および「27交13-280」を再検討することにした。

③「野菜の地域適応性検定」では、道南農試（北斗市）、豊浦町、比布町におけるいちご検定系統「空知38号」の生育・収量などを検定した。標準品種と同等あるいはやや優れると判断され、次年度も継続検討することとした。

④「作業管理システム及び生育予測を核とした大規模施設園芸発展スキームの構築」では、いちごの局所暖房による生育促進効果ならびに燃料節減効果の検証を行った。

⑤「いちご新品種‘ゆきララ’の安定生産に向けた栽培法の確立」では、生産現場での課題（果房数の確保や収穫初期の規格内収量の確保）を解決する栽培試験を行った。

⑥「トマトにおける養液栽培システム‘ういずOne’を用いた省力低コスト栽培法の確立」では、裂果、収量および食味からみた適品種と仕立て法に対応した給液管理を検討した。

⑦「機械化栽培体系を想定した加工用トマトの栽培法の確立および品質評価と試作品の開発」では、セル成型苗を定植に用いたときの栽培特性と、そ

れに基づく生産技術を明らかにした。

⑧「加工用トマトの品種特性評価」では供試4品種の生育および収量性、内部品質を標準品種‘なつのしゅん’と比較した。

⑨「ニンニク在来系統の特性評価試験」では、ホワイト種3系統、ピンク種3系統についての農業特性を明らかにした。

⑩「道産メロンの冬季供給を可能とする長期貯蔵出荷体系の確立」では、貯蔵の適温度・湿度、貯蔵に適する果実品質と、その果実を得るための栽培法を明らかにした。

⑪「MA包装資材等の活用による移出青果物の低コスト・高鮮度流通体系化実証」では、メロンを低温船便輸送できることを確認した。

⑫「たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発」では粘土、粘土鉱物およびピートモス組成の異なる試作培土の移植機への適用性を検討した。

⑬「鮮度保持触媒資材を用いた青果物の鮮度保持技術の実証」では、いちごとメロンを対象に金属触媒によるカビの抑制、MAフィルム内のガス組成の変化について検討した。

⑭「農業資材試験」では、たまねぎに対する除草剤3点およびブロッコリーに対する除草剤1点について成績をとりまとめた。

(2) 生産環境グループに関する試験

生産環境グループは、花き・野菜の肥培管理や貯蔵・流通等の栽培環境に関する試験および病害虫に関する試験を実施している。また、技術研修グループで実施する地域支援課題や技術研修を分担する。

1) 栽培環境に関する試験

①「北海道における加工用トマトの肥効調節型肥料を用いた施肥技術の確立」では、基肥の一部を肥効調節型肥料で代替する効果の検証を行った。また、寒冷な北海道の地温を考慮し、適当な溶出タイプを明らかにする検討を行った。委託元に結果を報告すると共に成果は生産現場において肥料の選定等に活用する。

②「たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発」では、有機栽培で使用できる培土の組成及び充填

方法の検討を行った。粘土とピートモスの比率は4:6、ベントナイト添加割合は10~15%が妥当と判断された。

③「加工・業務用途に対応したたまねぎ貯蔵性の解析とエチレン処理による長期貯蔵技術の開発」では、栽培法（直播、移植）、規格、施肥法（全量基肥、基肥+分施）が貯蔵性に及ぼす影響を検討した。また、加工・業務用4品種について、エチレン貯蔵を行うとともに、加工利用の可否に係る内部萌芽長の判断基準を加工業者の聞き取りから設定した。

④「露地栽培加工用トマトの病害発生実態と疫病防除対策の確立」では、施肥量と発病に係る場内試験において、収量や茎葉生育量の調査を行い、「露地栽培加工用トマトにおける疫病防除対策」として指導参考事項となった。

⑤「養液栽培システム「ういずOne」を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立」では、大玉トマトに対する2本仕立て給液法を検討した。

⑥「MA包装資材等の活用による移出青果物の低コスト・高鮮度移出体系」では、グリーンアスパラガスに関して、蔵置試験のべ7回と輸送実証試験のべ8回（関東・道内）を実施し、MA包装資材による包装と現状の氷詰め発泡スチロール箱包装および段ボール無包装での鮮度保持状況を比較検討した。また、スイートコーンに関しても、蔵置試験のべ6回と輸送実証試験のべ5回（関東）を実施し、MA包装資材による包装と現状の段ボール無包装での鮮度保持状況を比較検討した。これらの結果を基に「MA包装フィルムを用いたグリーンアスパラガスおよびスイートコーンの流通技術」として指導参考事項となった。

⑦「青果および加工利用における北海道産さつまいもの品質向上技術の開発」では、被覆資材による地温上昇効果および収量への影響、品種と収穫時期による収量および乾物率への影響、品種に対応した貯蔵条件をそれぞれ調査した。

⑧「農業資材試験」ではさつまいもに対して肥料1点の効果を調査した。

⑨「生理障害診断試験」では4件の診断依頼に対応した。

⑩「農業農村整備事業に係る土壌調査」では、3地区3箇所土壌調査を実施し、各土壌の特徴と改良対策を示した。

2) 病害虫に関する試験

①「新規ウイルス検査法を導入した道産にんにくのウイルスフリー種苗管理技術」では、道内にんにく生産地におけるウイルス病と媒介虫の発生実態調査を実施した。また、実態調査で得られたウイルスの遺伝子情報を元に、マクロアレイ法の試作キットを作製した。さらに、防虫ネットを用いた隔離による再感染防止効果を実施した。

②「いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性品種の育成」では、検定系統「空知38号」と「空知39号」について、疫病と萎黄病の特性検定ならびに萎凋病の抵抗性試験を実施した。「空知38号」と「空知39号」について次年度も検討を継続する。

③「露地栽培加工用トマトの病害発生実態と疫病防除対策の確立」では、道内の加工用トマト栽培における発生病害を整理するとともに、疫病の防除対策を明らかにした。「露地栽培加工用トマトにおける疫病防除対策」として、指導参考事項となった。

④「低濃度エタノールを用いた土壌還元作用による高設栽培いちごの培土消毒法の開発」では、いちごの高設栽培に用いた培土を充填したまま再利用するための低濃度エタノールを用いた土壌還元作用による消毒法を開発した。「いちごの高設栽培における低濃度エタノールを用いた土壌還元消毒による萎黄病の防除対策」として、指導参考事項となった。

⑤「農作物病害虫診断試験」では、38件の診断依頼に対応した。

⑥「農業資材試験」では、殺菌剤11点、殺虫剤8点についてその効果を調査した。また、複数事例で有効性が認められた14点の殺菌剤および殺虫剤が指導参考事項となった。

⑦「病害虫発生予察調査」では、ねぎのべと病とさび病について、時期ごとの発生量などを調査した。

(3) 技術研修グループに関する試験

技術研修グループは、地域農業技術支援会議に集められたニーズなど、現地実証が必要な課題について支援を行うとともに、これまでの成果を普及するために現地実証試験等を行っている。

1) 革新的技術導入による地域支援

①「赤肉メロン品種「おくり姫」の普及促進に向けた栽培実証」では、「おくり姫」の現地栽培実証を行い、現地評価（うどんこ病発生程度、肥大性、裂果程度、食味良否等）を明らかにした。収量性改善に向けては着果節位葉幅と果実着生孫づる太さに着目した初期の栽培管理が重要である。作付面積は増加傾向だが、今後の普及推進には糖度高位安定化と裂果防止の取り組みが必要である。

2. 技術普及室

(1) 推進方向

技術普及室は、地域の試験研究に対する要望を的確に把握し、実用的な技術開発を行うとともに、その迅速な普及・定着を普及組織と一体的に推進するために、技術体系化チーム活動、地域農業の支援（地域農業技術支援会議）、農業改良普及センターへの技術支援を3つの柱として、花き・野菜研修事業および農業大学校の研修事業の支援も含めて研究部門、農業改良普及センター、振興局および関係する機関団体と連携を図り活動を展開した。

(2) 成果の概要

1) 地域農業技術支援会議への支援

空知総合振興局の地域農業技術支援会議構成員として参画し、農業研究本部技術普及室・普及センター・振興局と連携し専門場の研究および普及の立場から、花きと野菜に関する課題整理や解決方策を積極的に支援した。三者会議・関係者会議の他、普及センターが主体となったモデル地区の課題解決プロジェクトに参画した。

2) 農業改良普及センター支援と普及指導員研修

普及センターからの支援要請について、専門項目に関する支援要請活動計画に基づき支援した。

また、普及センターが取り組む普及活動に関する要請（重点普及課題、普及課題等）についても、管轄農試技術普及室と連携し積極的に技術支援を行った。

さらに、気象災害や突発的な病害虫の発生に対して、技術普及課および各技術普及室と連携を取りながら迅速に対応した。

普及指導員研修については、花・野菜技術センターで実施する道段階研修の新任者早期養成研修、専門技術研修（花き、野菜）、高度専門技術研修（花き、野菜）について技術普及室のほか花き野菜グループ、生産環境グループ、技術研修グループからの講義・実習等の協力も得て実施し、振興局段階や職場段階での研修についても積極的に支援した。

3) 研修事業への支援

花き・野菜技術研修事業における、講義・実習および運営等に関する支援を実施した。

その他の研修として、農業大学校等との協力連携による農大稲作経営コース集中講義の支援を行った。

4) その他

営農技術対策の提供や各種事業への助言など、農業者組織や関係機関・各種団体からの要請への支援等を行った。

IV 試験研究および地域支援等活動の課題名

1. 花き野菜に関する試験

(1) 高温期の道外移出に対応した一年生切り花の
品質管理技術 (213291)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：花き野菜G

目的：ひまわり、なでしこ、マトリカリ
ア、スカビオサ、ブプレウムを対象に夏季に
道外移出する際の品質管理技術を示し、道内産
地から出荷される切り花の品質を高める。

(2) 春どり栽培向け多収性いちご新品種の育成
(213351)

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、生産環境G

目的：春どり栽培用に「ゆきララ」並の果
実品質を有する多収性いちご品種を育成する
(目標収量：「ゆきララ」対比120%)。

(3) 野菜地域適応性検定(いちご) (213302)

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、上川農試、道南農試

目的：育成系統の各地域における適応性
を検討し、新品種育成のための資料を得る。

(4) 作業管理システム及び生育予測を核とした大
規模施設園芸発展スキームの構築 (623381)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：花き野菜G

目的：次世代施設園芸北海道拠点におけ
るいちごの周年安定生産・出荷体制の確立に向
け、いちごに対する局所加温および冷却の効果
の検証と実証を行う。

(5) いちご新品種「ゆきララ」の安定生産に向け
た栽培法の確立 (213303)

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、上川農試、道南農試

目的：いちごの新品種「ゆきララ」の安
定生産に向けて、果房数の確保や収穫初期の規
格内収量を増加させる栽培法を確立する。

(6) 養液栽培システム「ういずOne」を用いた夏秋
トマトの高品質栽培技術の確立 (723311)

試験期間：平成31(令和元)～令和3年

担当 G：花き野菜G

目的：低コストで高品質な果実生産の可
能な養液栽培技術を開発し、トマトの生育、収
量、品質への影響を明らかにする。

(7) 機械化栽培体系を想定した加工用トマトの栽
培法の確立および品質評価と試作品の開発
(627581)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：花き野菜G、食品加工研究センター

目的：加工用トマトの機械化作業体系を
検討し、省力化技術を確立する。

(8) 加工用トマトに対する地下灌漑システムの有
効性の検証 (627581)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：中央農試、花き野菜G

目的：地下灌漑により開花期と果実肥大
期の干ばつを回避して安定生産させる。

(9) 加工用トマトの機械化栽培体系の確立
(627581)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：中央農試、花き野菜G

目的：転換畑地帯への導入促進のため、
機械化栽培体系の技術モデルを提示する。

(10) 加工用トマトの品種特性調査 (723301)

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G

目的：加工用トマト品種について北海道
での農業特性を評価し、安定生産に資する。

(11) ニンニク在来系統の特性評価試験 (723372)

試験期間：平成27年～31年(令和元年)

担当 G：花き野菜G

目的：道内で収集された複数のニンニク

在来系統に関する農業特性を評価し、情報を得て道内産のニンニク安定生産への資とする。

(12) 道産メロンの冬季供給を可能とする長期貯蔵出荷体系の確立 (123391)

試験期間：平成29～31年(令和元年)

担当 G：花き野菜G

目的：道産メロンの新たな需要の開拓と消費の拡大をすすめるため、長期貯蔵に対応した栽培管理技術を確立し、道産メロンの冬季流通システムを構築する。

(13) MA包装資材等の活用による移出青果物の低コスト・高鮮度流通体系化実証 (119171)

試験期間：平成27～31年(令和元年)

担当 G：生産環境G、花き野菜G

目的：MA包装資材による品質保持効果を活用した道産メロンの船便輸出を検討する。

(14) たまねぎ有機培土における育苗技術の開発 (325611)

試験期間：平成31(令和元)～令和4年度

担当 G：生産環境G、花き野菜G

目的：化学合成資材を使わずに機械移植可能な育苗培養土を開発し、作成された培養土に対応した育苗管理法を明らかにする。

(15) 鮮度保持触媒資材を用いた青果物の鮮度保持技術の実証 (513312)

試験期間：令和元年度

担当 G：花き野菜G

目的：新規触媒からなる鮮度保持資材のいちごとメロンでの鮮度保持効果を確認する。

(16) 農業資材試験 (729400)

試験期間：昭和40年～

担当 G：花き野菜G (各農試と分担)

目的：野菜に対する除草剤、生育調節剤の実用性を検討する。

2. 栽培環境に関する試験

(1) 北海道における加工用トマトの肥効調節型肥

料を用いた施肥技術の確立 (725302)

試験期間：平成30～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：肥効調節型肥料を利用し、寒冷地における地温および養分吸収に則した全量基肥の効率的施肥法を開発する。

(2) たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発 (325611)

試験期間：令和元年～4年

担当 G：生産環境G

目的：有機栽培で使用できる培土の組成及び充填方法を検討し、有機栽培における培土固化技術を開発する。

(3) 加工・業務用途に対応したたまねぎ貯蔵性の解析とエチレン処理による長期貯蔵技術の開発 (333393)

試験期間：平成29～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：加工・業務用途のたまねぎの安定供給に向けて、移植栽培と直播栽培の貯蔵性の差異を明らかにするとともに、エチレン処理による長期貯蔵技術を開発する。

(4) 露地栽培加工用トマトの病害発生実態と疫病防除対策の確立 (216391)

試験期間：平成29～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：道内の加工用トマト栽培における発生病害を整理するとともに、産地で実際に被害が問題となっている疫病について、施肥量の影響を含めた検討を行い、防除対策を確立する。

(5) 養液栽培システム「ういずOne」を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立 (723311)

試験期間：令和元年～3年

担当 G：花き野菜G、生産環境G

目的：低コストで高品質な果実生産の可能な養液栽培技術を開発し、トマトの生育、収量、品質への影響を明らかにする。

(6) MA包装資材等の活用による移出青果物の低コ

スト・高鮮度流通体系化実証 (119171)

試験期間：平成27～31年

担当 G：生産環境G、花き野菜G

目的：MA包装資材による品質保持効果について、グリーンアスパラガスとスイートコーンの首都圏等への移出における効果の検証と活用方法を明らかにする。

(7) 青果および加工利用における北海道産さつまいもの品質向上技術の開発 (513311)

試験期間：令和元～3年

担当 G：生産環境G、ホクレン農総研

目的：栽培方法や貯蔵方法の違いがさつまいもの品質に及ぼす影響を解析し、品質目標の作成、加工用途判別の資とする。さらに貯蔵期間中の変化を解析し適切な貯蔵方法を明らかにする。

(8) 農作物病害虫診断試験 ②生理障害診断試験 (216500)

試験期間：昭和50年～

担当 G：生産環境G（各農試と分担）

目的：農業改良普及センター、農政部普及指導員等を通じて現場に診断依頼される農作物の栄養・生理障害を診断し、被害軽減のための適切な対策を示す。

(9) 農業農村整備事業等に係る土壌調査 (426500)

試験期間：昭和40年～

担当 G：生産環境G（各農試と分担）

目的：北海道が実施する土地改良事業計画に基づき、該当地域の土壌調査を実施する。

3. 病害虫に関する試験

(1) 新規ウイルス検査法を導入した道産にんじくのウイルスフリー種苗管理技術 (124411)

試験期間：令和元年～3年

担当 G：生産環境G

目的：ウイルスフリー種苗の増殖体制の構築に不可欠なウイルス検査法と再汚染回避技術を確立する。

(2) いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性品種の育成 (213301)

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、生産環境G

目的：春どり栽培用に「ゆきララ」並の果実品質を有する多収性いちごの育種に係る、選抜系統の疫病・萎黄病の特性検定（病害抵抗性）と萎凋病抵抗性検定を実施する。

(3) 露地栽培加工用トマトの病害発生実態と疫病防除対策の確立 (216391)

試験期間：平成29～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：道内の加工用トマト栽培における発生病害を整理するとともに、産地で実際に被害が問題となっている疫病の防除対策を確立する。

(4) 低濃度エタノールを用いた土壌還元作用による高設栽培いちごの培土消毒法の開発 (326391)

試験期間：平成29～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：いちごの高設栽培に用いた培土を充填したまま再利用するため、人や周囲の作物に影響を及ぼすリスクの少ない、低濃度エタノールを用いた土壌還元作用による消毒法を開発する。

(5) 農作物病害虫診断試験 ①突発及び病害虫診断試験 (216500)

試験期間：昭和50年～令和元年

担当 G：生産環境G（各農試と分担）

目的：突発的に発生する病害虫による被害を防止するため、それらの診断を行うと共に、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し、蓄積する。

(6) 農業資材試験 殺菌・殺虫剤 (729400)

試験期間：昭和45年～

担当 G：生産環境G（各農試と分担）

目的：新しい殺菌剤および殺虫剤の花き・野菜の病害虫に対する防除効果と薬害の有無

ならびにその実用性を検討する。

(7) 病害虫発生予察調査 (426500)

試験期間：昭和16年～

担当 G：生産環境G（各農試と分担）

目的：各地の病害虫発生状況と気象等を踏まえて病害虫の発生を予察し、効率的な防除に資する。当场ではねぎの病害および各種害虫の誘殺状況を調査する。

担当 G：技術研修G、花き野菜G、生産環境G

目的：ビニル素材・遮光素材を同一条件で比較し、日射量や温湿度など栽培環境に対する影響を確認・提示する。

4. 地域支援に関する試験等

(1) 赤肉メロン品種「おくり姫」の普及促進に向けた栽培実証

(319971)

試験期間：平成30～令和元年

担当 G：技術研修G

目的：メロンハウス抑制栽培を対象にして、「おくり姫」の特性を活かした栽培実証を行い、地域への品種の普及を促進する。

(2) トマト軟果玉の発生原因の解明と対策

試験期間：平成30～令和元年

担当 G：技術研修G

目的：トマト軟化玉発生ステージ、発生環境、土壌水分条件等の明確にし、発生要因別対策の提示する。

(3) 加工用トマトにおける適正な施肥量の検討

試験期間：平成30～令和元年

担当 G：生産環境G

目的：定植後からの各養分（窒素、リン酸、加里、苦土、石灰）吸収量を把握し、緩効性肥料の溶出速度を把握するとともに適正施肥量・施肥体系を決定する。

(4) ミニトマト栽培におけるビニル・遮光資材の違いがもたらす栽培環境への影響確認

試験期間：令和元年

V 研修事業の概要

1. 概要

本道における花き・野菜の生産振興を支援するため、新技術（品種）の迅速な普及定着や生産を担う人材の育成等を目的とした技術研修を実施した。

2. 研修事業の推進

北海道花き・野菜技術研修に対する理解を深めるため、農政部関係課・農業高校・農業改良普及センター、市町村等への訪問、農業関係団体主催会議にて事業説明を実施した他、場内に専門委員会（研修事業運営委員会）を設置し、計画の策定、事業の円滑な実施・運営等について検討・調整を行った。

(1) 研修事業説明の経過

- 1) 5月9日
高等学校校長協会農業部会
- 2) 7月10日
道公社地区別推進会議（旭川市）
- 3) 7月11日
道公社地区別推進会議（北見市）
- 4) 7月12日
道公社地区別推進会議（苫小牧市）
- 5) 7月18日
道公社地区別推進会議（芽室町）
- 6) 7月19日
道公社地区別推進会議（釧路市）
- 7) 7月25日
道公社地区別推進会議（岩見沢市）
- 8) 10月28日
滝川市研修・研究に係る意見交換会
- 9) 1月27日
新規参入予定者（ベーシックセミナー）

(2) 事業課との打合せ

- 1) 8月20日～21日
相手方：道農政部農業経営課、農産振興課、
技術普及課
場 所：花・野菜技術センター
内 容：技術研修事業視察及び打合せ

(3) 専門委員会開催内容

- 1) 研修事業運営委員会の構成(平成31年4月現在)
委員長：鳥越昌隆(技術研修G研究主幹)
委 員：横尾修・市川雅一(総務課)、
大宮知・柳田大介・大久保進一(花き野菜G)、上野達・佐々木純(生産環境G)、
植野玲一郎(技術研修G)
オブザーバー：宮町良治(上席普及指導員)、鹿野理(主任普及指導員)
事務局：山井雅之・高橋英樹(技術研修G)
- 2) 開催内容
 - ① 第1回委員会（4月17日）
 - ア) 協議事項
 - ・2019年度総合技術研修カリキュラム・担当について
 - ・2020年度花き・野菜技術研修(総合・専門)募集要領について
 - ・2019年度各種セミナー・研修について
 - ・2019年度課題解決セミナー（品目別セミナー）について
 - ② 第2回委員会（10月23日）
 - ア) 協議事項
 - ・令和元年度花き・野菜ベーシックセミナーについて
 - ・花・野菜新技術セミナー2020について
 - イ) 報告事項
 - ・令和元年度課題解決研修（品目別研修）について
 - ・令和元年度総合技術研修及び専門技術研修実施状況
 - ・その他研修実施状況
 - ・令和2年度総合技術研修受講相談状況
 - ③ 第3回委員会（12月27日）
 - ア) 協議事項
 - ・令和元年度花き・野菜ベーシックセミナーについて
 - ・花・野菜新技術セミナーについて
 - ・2020年度課題解決研修（品目別研修）について
 - イ) 報告事項
 - ・2020年度総合技術研修応募・受講相談状況

④ 第4回委員会（1月29日）

ア) 協議事項

- ・花・野菜新技術セミナー2020について
- ・令和3年度北海道花き・野菜技術研修(総合・専門) 募集要領について

⑤ 第5回委員会（3月24日）

ア) 協議事項

- ・令和2年度課題解決研修(品目別研修)について
- ・令和3年度北海道花き・野菜技術研修(総合・専門) 募集要領の見直しについて
- ・市民園芸セミナーについて

3. 北海道花き・野菜技術研修

(1) 専門技術研修

生産者、技術指導者を対象に、高度な専門技術の習得を目的に、課題解決や各種分析技術等についての個別指導を行った。

1) 専門技術研修受講者数

区 分	受講者数
花き栽培コース	—
野菜栽培コース	2名
土壌肥料コース	4名
病害虫コース	2名
合 計(延べ)	8名

2) 専門技術研修受講者及び研修内容

氏 名	所 属	期 間	主 な 研 修 内 容
紺野 徹	ホクレン 肥料(株)	5/13~5/24	野菜栽培管理
瀬川玲維	ホクレン	6/10~6/21	土壌肥料管理
西橋 潤	ホクレン	6/10~6/21	土壌肥料管理
中村勇稀	ホクレン	6/17~9/6	野菜栽培管理
印南宏亮	ホクサン (株)	6/24~7/5	病害虫管理
佐々木健真	ホクレン	6/24~7/5	病害虫管理
大村洗平	拓殖短大	11/7~11/8	いちご等の作物体

			分析
坪谷文花	拓殖短大	11/7~11/8	いちご等の作物体 分析

(2) 総合技術研修

生産者、技術指導者を対象に、基礎知識から実践技術までの習得を目的に編成したカリキュラムに基づき総合的な指導を行った。

- 1) 期間 4月9日~10月4日
- 2) 受講者数 花きコース 2名
野菜コース 5名

3) 総合技術研修の受講者

氏 名	所 属 等	備 考
林 達也	富良野市	野菜コース
本間天菜	苫小牧市	野菜コース
池田雅司	岩見沢市	野菜コース
佐瀬拓也	当別町	花きコース
高木大輔	深川市	野菜コース
山元亮平	新篠津村	花きコース
桑山耕太郎	恵庭市	野菜コース (6/3~10/4)

4) 総合技術研修の実施内容

区分	主 な 内 容 (講 師)	時 間
講義	<ul style="list-style-type: none"> ・土壌肥料(上野主査、野田研究主査(生産環境G)) ・病害虫防除(美濃研究主幹、佐々木主査、柿崎専門研究員(生産環境G)) ・施設資材利用等(外部講師) ・主要野菜栽培技術(柳田主査、大久保主査、木村研究主任(花き野菜G)、野田研究主査(生産環境G)、宮町上席普及指導員(技術普及室)、鳥越研究主幹、植野主査(技術研修G)) ・主要花き栽培技術(大宮主査(花き野菜G)、鹿野主任普及指導員(技術普及室)、鈴木研究主幹(十勝農試)、植野主査(技術研修G)) ・雑草防除の基礎(外部講師) ・野菜の流通と野菜システム(宮町上席普及指導員(技術普及室)) 	野菜52時間 花き48時間

	<ul style="list-style-type: none"> ・青果物鮮度の内部品質と保持(田丸研究主査(生産環境G)) ・花きの出荷調製と品質保持(植野主査(技術研修G)) ・花きの流通と市場システム(鹿野主任普及指導員(技術普及室)) ・経営管理(外部講師) ・農地制度の基礎(外部講師) ・農業金融制度(空知総合振興局) ・GAP制度(北海道農政部) ・その他(三好研究部長、宮町上席普及指導員(技術普及室)) 	
演習	<ul style="list-style-type: none"> ・主要野菜栽培等(柳田主査(花き野菜G)、宮町上席普及指導員(技術普及室)、鳥越研究主幹、植野主査(技術研修G)) ・土壌診断(野田研究主査(生産環境G)) ・病害虫防除技術(美濃研究主幹、佐々木主査、柿崎専門研究員(生産環境G)) ・青果物の内部品質と鮮度保持(田丸研究主査(生産環境G)) ・園芸資材利用法(外部講師) ・雑草防除技術(外部講師) ・ハウス組立(鳥越研究主幹、植野主査、玉川主任他(技術研修G)) ・作業機械操作実習(玉川主任他(技術研修G)) 	野菜54時間 花き53時間
実習	<ul style="list-style-type: none"> ・主要野菜の栽培管理(野菜15品目(講師は講義・実習と同じ)) 	野菜 545時間 花き 526時間
その他	卸売市場、先進農家等	野菜 25時間 花き 32時間
	ミーティング、栽培計画書作成、報告書作成等	野菜 154時間 花き 171時間
合計		野菜 830時間 花き 830時間

1月27日～1月31日(5日間)

2) 受講者数

野菜コース 28名

花きコース 4名

3) 基礎技術研修の実施内容

講義名	時間	講師
花き・野菜栽培概論	花き 1時間	大宮主査(花き野菜G)
	野菜 1時間	柳田主査(花き野菜G)
主要品目の栽培技術	花き 10時間	福川研究主幹、柳田主査、大宮主査、大久保主査、木村研究主任、(花き野菜G)、野田研究主査(生産環境G)、宮町上席普及指導員、鹿野主任普及指導員(技術普及室)、鳥越研究主幹、植野主査(技術研修G)
	野菜 11時間	
土壌改良と施肥管理	2時間	上野主査(生産環境G)
病害虫	2時間	佐々木主査(生産環境G)
園芸施設資材の特性と利用技術	2時間	外部講師
花きの輸送と品質保持	2時間	植野主査(技術研修G)
花き市場と販売	1時間	鹿野主任普及指導員(技術普及室)
野菜の流通と内部品質	2時間	田丸研究主査(生産環境G)
農地制度の基礎	2時間	外部講師
経営管理概論	3時間	外部講師
新規就農者の経営事例	2時間	農業者ほか
道内の新顔野菜	2時間	外部講師
花・野菜技術センターの概要、技術開発と普及	45分間	三好研究部長、宮町上席普及指導員(技術普及室)
最近の農業技術に関する話題	1時間	宮町上席普及指導員(技術普及室)
	花き野菜各30時間45分	

(3) 基礎技術研修(ベーシックセミナー)

花き及び野菜栽培を志向する新規就農者等の支援を目的に花・野菜栽培に関する基礎知識や技術についての指導を行った。

1) 期間

(4) 課題解決研修

農業試験場が開発した技術や品種の迅速な普及定着、生産技術の高位平準化、産地の育成等を目的とした各種セミナーの開催や短期受け入れ研修を実施した。

1) いちご「ゆきララ」フィールドセミナー2019

道内におけるいちごの安定生産と花・野菜技術センター育成のいちご新品種「ゆきララ」の普及に資するため、「ゆきララ」の特性、栽培法の検討、さらにPRを含めた普及活動の取組について情報提供した。

◇日 時 平成31年4月23

◇場 所 花・野菜技術センター講堂及びほ場

◇内 容

①「ゆきララ」の特性について

講師：花・野菜技術センター

研究主幹 福川英司

②「ゆきララ」の栽培法に係る検討について

講師：花・野菜技術センター

研究職員 柏谷太亮

③「ゆきララ」の普及に向けた取り組みについて

講師：花・野菜技術センター

研究主任 木村文彦

◇受講者数 47名

2) フォローアップセミナー

花き・野菜技術研修の過年度修了者を対象に、技術支援と研修修了者・現研修生の情報交流を目的に開催した。

◇日 時 令和元年6月28日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容

- ・研究概要の紹介
- ・研修圃場の紹介
- ・意見交換

◇受講者数 16名

3) ～発泡箱でトマトづくり！簡易養液栽培～ういずOneセミナー

栽培管理が容易で、安価な栽培システムであるとして、道内外で導入が進んでいる簡易養液栽培法「ういずOne」の普及を図るため、セミナーを開催した。

◇日 時 令和元年8月29日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容

・講演会

①「ういずOneにおける全国の取り組み」

講師：JA全農 耕種資材部資材課

高永優衣氏

②「ういずOneを利用した大玉トマト栽培」

講師：ホクレン営農支援センター

営農技術課調査役 谷 雄人氏

③「ういずOneを利用したミニトマト栽培」

講師：花・野菜技術センター

主査 大久保進一

④「ういずOneの現状の利用方法」

講師：上川農業改良普及センター

地域第三係長 田下浩二氏

⑤「全体討議」

コーディネーター：北海道農政部

技術普及課 上席普及指導員 宮町良治

◇受講者数 61名

4) 花・野菜新技術セミナー2020

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

◇開催予定日時 令和2年2月26日

◇開催予定場所 新十津川町総合健康福祉センター「ゆめりあ」ほーる

(5) 市民セミナー

消費者等を対象に、道産の花・野菜及び当センターに対する理解を深めることを目的とした各種セミナーを開催した。

1) 市民園芸セミナー

◇日 時 令和2年5月8日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容

・講義「栄養満点の緑黄色野菜「ブロッコリーをつくろう！」

講師：北海道農政部技術普及課

上席普及指導員 宮町良治

◇参加者数 18名

2) フラワーデザインセミナー

◇日 時 令和元年8月9日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容

・フラワーアレンジメント教室

講師：池坊光明流清美会

奥 祥華氏、山本寛子氏

◇参加者数 23名

(6) その他の研修

1) JICA研修員受入事業（滝川市国際交流事業）

- ◇日 時 令和元年8月19日
- ◇場 所 花・野菜技術センター
- ◇内 容 花・野菜技術センターの概要、試験研究と普及事業との連携等
- ◇参加者数 8名（モザンビーク共和国）

2) 農業大学校（稲作経営専攻コース）研修生受入

- ◇日 時 令和元年8月7日～8月9日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容 花・野菜技術センターの概要等

◇参加者数 8名

3) JICA草の根技術協力事業（滝川市国際交流事業）

- ◇日 時 令和元年8月21日
- ◇場 所 花・野菜技術センター
- ◇参加者数 4名（モンゴル国研修生）
- ◇内 容 花・野菜技術センターの概要等

4. 研修ほ場等作付概要

区分	品目	品種	作型
	ほうれんそう	・ブライトン、ネオサイクロン、カイト、スーパーニック	・雨よけ春夏まき
		・晩抽サンホープ、トリトン、晩抽サマースカイスーパーニック	・雨よけ夏まき
	だいこん	・貴宮、晩々G、蒼の岩	・春まき
	スイートコーン	・ゴールドラッシュ、ゆめのコーン、ピュアホワイトドルチェドリーム	・露地直はん
	メロン	・ルピアレッド、摩周レッド、オトメの祈り、レッド113	・無加温半促成
	ミニトマト	・アイコ、キャロル10	・ハウス夏秋どり
	アスパラガス	・スーパーウエルカム、ガインリム、ゼンユウガリバー	・春どり露地(定植6年目)
・ウエルカム、ガインリム		・ハウス立茎栽培	

注) 総合技術研修共通栽培品目のみ掲載。

VI 研究発表並びに普及事項

1. 研究報告・資料

(1) 研究報告

○大久保進一・高濱雅幹・尾崎洋人・中住晴彦.
単為結果性トマト品種の生育、収量および品種特性評価と摘果の影響. 北海道立総合研究機構農業試験場集報. 104:55-62 (2019).

○Kayamori, M., Shimizu, M., Yamana, T., Komatsu, T., Iketani, M., Shinmura, A., Sasaki, J., Kozawa, T., Notsu, A., Yasuoka, Shinji. First report of QoI resistance in *Cercospora beticola* in sugar beet in Japan. *Journal of General Plant Pathology*. 86:143-148(2020).

(2) 口頭発表

○木村文彦・柏谷太亮・福川英司. イチゴ‘ゆきララ’の定植期および苗質が生育・収量に及ぼす影響(第2報)累年成績と秋保温の検討. 北海道園芸研究談話会報. 53:58-59 (2020).

○柳田大介・古山真一. ブロッコリー品種の花蕾肥大に関する考察. 北海道園芸研究談話会報. 53:38-39 (2020).

○木村文彦・柏谷太亮・福川英司. 寒地での半促成栽培における低温遭遇時間がイチゴ‘ゆきララ’の収量に及ぼす影響. 園芸学会春季大会(2020. 3. 21-22).

○佐々木純・増田 税・古田和義・高橋春南・古川勝弘. 北海道におけるニンニクからのリーキ黄色条斑ウイルス, タマネギ萎縮ウイルスおよびallexivirusの検出. 日本植物病理学会報. 86:30 (2020)

○佐々木純・増田 税・古田和義・高橋春南・古川勝弘. 北海道におけるニンニクのallexivirusの発生分布. 日本植物病理学会大会 (2020. 3. 19-21).

○藤根 統・新村昭憲. 水稻の蒸気式催芽における食酢を使用した褐条病防除. 第73回北日本病害虫研究発表会(2020. 2. 20-21).

○藤根 統・森万菜実・西脇由恵. 北海道におけるアズキ茎疫病菌の病原性の多様性について. 令和2年度日本植物病理学会大会 (2020. 3. 19-21).

(3) 著書・資料

○柳田大介. 北海道野菜地図(その43). 北海道野菜地図編集委員会(北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会)共著. (2020).

○植野玲一郎. かすみそうほか. “北海道フラワーガイド(その28)”. 北海道フラワーガイド編集委員会編. 北海道農業協同組合中央会・ホクレン農業協同組合連合会(2020).

(4) 専門雑誌・記事等

○大久保進一. 養液栽培システム「ういずOne」を用いたトマト栽培法. 農家の友. 71(5):44-46 (2019).

○大久保進一. 養液栽培システム「ういずOne」水稲育苗後のハウスでミニ・大玉トマト栽培. ニューカントリー. 66(6):44-45 (2019).

○木村文彦. ピックアップ「ほうれんそう」～栽培方法. ニューカントリー. 66(12):115-117 (2019).

○柳田大介. 一斉収穫に適したブロッコリーの品種特性. 71(5):68-70 (2019).

○柳田大介. なるほど新技術‘ブロッコリー’省力的な一斉収穫に適した品種明らかに. ニューカントリー. 66(11):50-51 (2019).

○柳田大介. ピックアップ「スイートコーン」栽培方法check1. ニューカントリー. 66(11):104-106 (2019).

○大宮 知. シャクヤクの切り花貯蔵による出荷延長技術. 農家の友. 71(7):44-46 (2019).

○大宮 知. リンドウの需要期出荷に向けた切り花貯蔵技術. 農家の友. 71(9):46-47 (2019).

○大宮 知. リンドウ 切り花を箱で貯蔵し需要期に向け出荷調節. ニューカントリー. 66(8):60-61 (2019).

○大宮 知. 切り花貯蔵によるしゃくやくの出荷期間延長技術. ニューカントリー. 67(3):56-57 (2020).

○木村文彦. ピックアップ「レタス」. ニューカ

ントリー. 67(4):95-97(2020).

○植野玲一郎. 花・野菜ベーシックセミナー. 農家の友. 71(4):82-85(2019).

○植野玲一郎. ピックアップねぎ. ニューカントリー. 67(2):103-105(2020).

○藤根 統. なるほど新技術「食酢を蒸気式催芽でも利用する方法明らかに」. ニューカントリー. 66(12):54-55(2019).

(5) 新聞記事・広報誌、放送等

○大宮 知. しゃくやくの切り花貯蔵による出荷延長技術. 農業共済新聞. 6月5日号(2019).

○大宮 知. りんどう 需要期に向けた切り花貯蔵技術. 農業共済新聞. 7月17日号(2019).

○大久保進一. 「冬の営農塾」発泡箱での「トマト作り 簡易養液栽培法のポイントは?」. 日本農業新聞北海道版. 3月20日号(2020).

○藤根 統. 「冬の営農塾」蒸気式催芽でも食酢を使って稲の細菌病が防げます. 日本農業新聞北海道版. 3月13日号(2020).

○藤根 統. 蒸気式催芽における食酢を使った稲の褐条病および苗立枯細菌病の防除法. 有機農研117号(2019).

(6) 出願公表

(7) 品種登録

(8) 受賞

2. 印刷刊行物

3. 普及事項

(1) 普及奨励事項

(2) 普及推進事項

(3) 指導参考事項

○セル成型苗を用いた加工用トマトの栽培技術
○高温期の道外移出に対応した草花類の品質管理技術

○MA包装フィルムを用いたグリーンアスパラガスおよびスイートコーンの流通技術

○露地栽培加工用トマトにおける疫病防除対策

○低濃度エタノールを用いた土壌還元作用による高設栽培いちごの萎黄病に対する培土消毒法

○トマトの疫病に対するカスガマイシン・銅水和剤の効果

○トマトの疫病に対するシアゾファミド水和剤Fの効果

○トマトの疫病に対するシアゾファミド水和剤F(14日間隔散布)の効果

○トマトの疫病に対するベンチアバリカルブイソプロピル・TPN水和剤DFの効果

○トマトの疫病に対するマンジプロパミド水和剤Fの効果

○トマトの疫病に対するマンジプロパミド水和剤F(14日間隔散布)の効果

○トマトの疫病に対するマンゼブ水和剤の効果

○トマトの疫病に対する銅(水酸化第二銅)水和剤DF(46.1%(Cu30.0%))の効果

○にんじんの黒葉枯病に対するピコキシストロビン水和剤Fの効果

○メロンのうどんこ病に対するイミノクタジナルベシル酸塩・ピリオフェノン水和剤DFの効果

○トマトのオンシツコナジラミに対するフルキサメタミド乳剤の効果

○トマトのオンシツコナジラミに対するピリフルキナゾン水和剤DFの効果

○トマトのミカンキイロアザミウマに対するフルキサメタミド乳剤の効果

○ミニトマトのオンシツコナジラミに対するピリフルキナゾン水和剤DFの効果

(4) 研究参考事項

Ⅶ その他

1. 職員の研修

(1) 職場外研修（階層別、能力開発）

受講者	研修項目	実施機関	場所	期間
三好 智明	新任研究部長級研修	道総研本部	札幌市	元. 4. 23-24
杉山 善康	ハラスメント研修	道総研本部	札幌市	元. 5. 15
三好 智明	ハラスメント研修	道総研本部	札幌市	元. 5. 30
横尾 修	ハラスメント研修	道総研本部	札幌市	元. 5. 30
高崎 真利奈	会計制度研修	道総務部	札幌市	元. 8. 1
杉山 善康	新任課長級研修	道総務部	札幌市	元. 8. 5
高崎 真利奈	ハラスメント研修	道総研本部	札幌市	元. 9. 3

(2) 職場研修等（集合・伝達研修）

研修等	実施月日	内容	人数
伝達研修(交通安全)	4/17	職員の交通事故・違反の防止	29人
職場研修(危機管理)	5/31	ハラスメント研修	21人
伝達研修(農作業安全)	5/31	農作業安全研修	29人
伝達研修(交通安全)	11/7	飲酒運転の防止に向けた緊急指示	26人
健康づくりセミナー	11/15	資質をコントロール、腎臓をいたわる生活	20人
伝達研修(交通安全)	12/23	交通事故・違反の防止	29人
職場研修(情報セキュリティ)	2/19・26	報セキュリティ対策（自己点検）	29人

2. 見学・参観

月日	団体名	人数
6/10	砂川トマト生産組合 (JA新砂川)	28
6/19	アヲハタ(株)	7
6/20	たきかわRCクラブ	10
6/21	中富良野町旭中北農事組合班	20
6/28	十勝北部普及センター	5
7/8	端野町農民同盟 (JAきたみらい(北見市))	14
7/8	そらち南農協中玉トマトの会	16
7/8	モンゴル視察	6
7/10	富良野緑峰高等学校農業特別 専攻科	15
7/17	北大農学部 生物資源科学科	40
7/23	富良野緑峰高等学校	35
8/5	北海道東藻琴高等学校	7

月日	団体名	人数
8/19	モザンビーク	10
8/21	モンゴル国県知事	7
8/27	JAよいち女性部	15
9/6	光食品(株)	3
9/11	後志地区施肥防除合理化推進 協議会	15
9/11	北海道種苗協同組合	15
9/24	農業大学校教育部畑作園芸班	9
9/25	広島県立西条農業高等学校	25
10/3	農業・食品産業技術総合研究 機構	5
10/4	(財)栗山町農業振興公社	8
10/24	JAたいせつ青果物生産出荷協 議会たいせつ支部	12
10/30	後志地方農業委員会連合会	50
12/5	JA音更 玉葱・人参部会	15

月	団体数	人数
4月	0	0
5月	0	0
6月	5	70
7月	6	126
8月	4	39
9月	5	67
10月	4	75
11月	0	0
12月	1	15
1月	0	0
2月	0	0
3月	0	0
合計	25団体	392人

3. 研修生の受入れ（研修事業以外）

(1) 普及指導員研修

1) 専門技術研修（野菜） 7/1～7/5

研修項目	対象者	担当
主要野菜の現場対応に必要な課題	後志(本所) 坂内 泰輔	技術普及課
解決手法の習得	後志(本所) 嶋原 稜 後志(本所) 原田 藍 日高(本所) 山本 博規 渡島(北部) 小島 伸子 上川(本所) 河村 倫希 上川(富良野) 沼袋 友紀 上川(士別) 表 明宏	技術普及室 技術研修G 花き野菜G 生産環境G

2) 専門技術研修（花き） 7/1～7/5

研修項目	対象者	担当
主要花きの現場対応に必要な課題	空知(本所) 上原 智子 渡島(本所) 高松 砂織	技術普及課 技術普及室 技術研修G
解決手法の習得		花き野菜G 生産環境G

3) 高度専門技術研修（野菜）

6/17～6/21, 7/22～7/26, 9/2～9/6

研修項目	対象者	担当
野菜栽培に係る新技術	上川(本所) 樋口 裕二 網走(清里) 清水 理沙	技術普及課 技術普及室
および調査		技術研修G
研究手法の習得		花き野菜G 生産環境G

4) 高度専門技術研修（花き）

6/17～6/21, 7/22～7/26, 9/2～9/6

研修項目	対象者	担当
花き栽培に係る新技術	上川(名寄) 佐藤 元紀 十勝(東部) 高田 和明	技術普及課 技術普及室
および調査		技術研修G
研究手法の習得		花き野菜G 生産環境G

5) 新任者早期養成研修（新任者Ⅱ） 11/7～11/9

研修項目	対象者	担当
自己課題研修の進度確認と普及指導能力の向上	空知(本所) 宅見 秋穂 ほか新任2年目の普及職員15名	技術普及課 技術普及室

4. 委員会活動

(1) 各専門委員会の名簿

(平成31年4月1日現在)

ア. 業務委員会

鳥越昌隆（委員長）、市川雅一（総務課）、江原 清（花き野菜G）、野田智昭、藤根 統（生産環境G）、北 和宏（技術研修G）

イ. 環境整備委員会

福川英司（委員長）、高崎真利奈（総務課）、佐々木純（生産環境G）、植野玲一郎・北和宏（技術研修G）

ウ. 図書委員会

美濃健一（委員長）、横尾修（総務課）、柏谷太亮（花き野菜G）、上野達（生産環境G）、高橋英樹（技術研修G）

エ. 研修事業委員会

V 研修事業の概要参照

オ. 情報システム委員会

大久保進一（委員長）、横尾修（総務課）、柏谷太亮（花き野菜G）、佐々木純（生産環境G）、高橋英樹（技術研修G）

(2) 各専門委員会の活動

1) 業務委員会

- ア. 業務委員会の開催
 - (ア) 通常：4月5日～11月28日、毎週1回
 - (イ) 冬期：11月30日～3月29日、毎月1回
 - (ウ) 拡大：4月20日

- イ. 主な検討事項
 - (ア) 週間・月間作業計画
 - (イ) ほ場、ハウス、温室等施設の利用計画
 - (ウ) ほ場の整備工事（排水路、暗渠）
 - (エ)ハウスの張り替え計画
 - (オ) その他

- ウ. 主催行事
 - (ア) 蒔付祝い 6月14日
 - (イ) 収穫祭 10月25日

2) 環境整備委員会

- ア. 庁舎前花壇：マリーゴールド他（7/23）、
チューリップ（10/29）の定植
- イ. 旧十勝道路沿い：ゴミ拾い（5/24）、アジサイ等の管理作業
- ウ. その他敷地内：防風林剪定、枯木の除去

3) 図書委員会

- ア. 図書委員会の開催
 - ・第1回情報図書委員会(平成31年4月15日)：活動・予算計画、情報システム委員会の設置
 - ・第2回図書委員会(令和2年3月19日)：活動の総括、次年度への懸案事項、年報原稿依頼、見学案内原稿依頼
- イ. 見学案内に関する事
 - ・見学案内資料の作成
 - ・見学案内リハーサル(6月10日)
 - ・普及センター等への参加呼びかけ
 - ・ハウス群の試験内容の掲載徹底
- ウ. 場の広報に関する事
 - ・平成30年度年報の作成と公開
 - ・ロビー設置ポスターおよびちらしの展示・更新(技術研修Gに実施いただいた)
- エ. 法人情報システム(含むホームページ)の管理・運営等を分離・独立させ、情報システム委員会として設置した。
- オ. 図書の整備(購入)および管理に関する事
 - ・図書資料の受け入れ
 - ・図書資料の購入
「青果物の鮮度評価・保持技術」
 - ・雑誌類や成績書の簡易製本

成績書および定刊等で35冊の製本を実施

4) 研修事業委員会

V 研修事業の概要参照

5) 情報システム委員会

- ア. 情報システム委員会の開催
 - ・第1回情報システム委員会(平成31年4月15日)：活動・情報システム委員会の設置、委員長を選出、規約の検討
 - ・第2回情報システム委員会(令和元年9月13日)：ホームページの修正分担、模擬テレビ会議対応、Windows7の更新状況調査
- イ. 法人情報システム(含むホームページ)の管理・運営に関する事
 - ・道総研ウェブアクセシビリティに対応したホームページの修正
 - ・場代表アドレスの管理(研究部長対応)

5. 公開デー2019の実施

8月9日(金)に実施。

(来場者数：138名)

(1) 屋内会場の催し物

- フラワーデザインセミナー(技術研修G)
- 花の色を変える実験(花き野菜G)
- 病害虫診断コーナー(生産環境G)
- 土壌診断コーナー(生産環境G)
- 園芸相談コーナー(技術普及室)
- パネル展示コーナー
- YES!clean展示
- 園芸関係書籍販売コーナー(農文協、普及協会)
- 展示温室：メロン、ピーマン、花壇苗、トマト、オクラ、さつまいも、なす等
- 農産加工品直売コーナー
 - ・市内総合技術研修0B
- 研修生による生産物の販売
- 拓殖大学、新十津川農業高校展示

(2) 屋外会場の催し物

- メロン品種の試食(花き野菜G)
- 苗当てクイズ(花き野菜G)
- 農業機械展示(技術研修G)
- バスによる圃場見学

6. 講師等の派遣

- 大宮 知. 北海道花きの現状. 農研機構東北農業研究センター (2019. 9. 25)
- 柳田大介. 特別講義(二)「生物産業ビジネスと地域活性化」. 東京農業大学生物生産学部 (2019. 10. 29)
- 木村文彦. 日本国北海道におけるいちご生産について. 中国いちご産業学術報告会 (2019. 12. 20)
- 木村文彦. ふっくりあまい、ほっかいどういちご「ゆきララ」の紹介. 北海道農政部 (2020. 2. 25)
- 植野玲一郎. メロン「おくり姫」の普及状況と栽培のポイントについて. 北海道キングメルティー会 (2019. 12. 3).
- 植野玲一郎. メロン「おくり姫」の普及状況と栽培のポイントについて. メロンサミット会 (2019. 12. 12).
- 植野玲一郎. メロン「おくり姫」栽培講習会. JAようていメロン生産組合蘭越支部栽培講習会 (2020. 2. 7).
- 鳥越昌隆. 北海道の野菜 今、昔. 北海道食文化研究会 (2019. 10. 10).

7. 各種委員

- 柳田大介. 北海道野菜地図編集委員会委員.
- 福川英司. 日本植物調節剤研究協会専門委員.
- 大久保進一. 地熱・温泉熱アドバイザー. 北海道経済部.
- 植野玲一郎. 北海道フラワーガイド編集委員.
- 植野玲一郎. 北海道園芸研究談話会会計幹事.
- 三好智明. 北海道さつまいも懇話会事務局長.
- 植野玲一郎. 北海道さつまいも懇話会事務局.
- 上野 達. 北海道さつまいも懇話会事務局
- 野田 智昭. 北海道さつまいも懇話会事務局

Ⅷ 自己点検への対応

事 項	件数等		
	H31	H30	H29
各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	0	4	1
同参加者数	0	538	77
研究会等の開催件数	0	0	0
展示会等への出展件数	2	0	2
研究報告書の発行件数	0	0	2
技術資料の発行件数	0	0	2
その他紙媒体発行件数	0	0	0
普及組織との連絡会議等開催件数	10	15	8
企業等へ訪問し広報活動した件数	10	8	3
行政や企業等で活用された成果の数	2	0	0
設備使用の件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	6	10	12
研究会における公表件数	0	0	0
学会誌等への投稿件数①学会誌	2	8	10
学会誌等への投稿件数②雑誌（専門誌、商業誌）	16	14	13
学会誌等への投稿件数③書籍	2	2	3
学会誌等への投稿件数④新聞	5	0	2
学会誌等への投稿件数⑤その他	0	1	0
研究報告書での発表件数	1	1	0
学会やシンポジウム等での発表件数	7	8	17
ホームページ等による公表件数	0	0	1
プレスリリース、定例報道懇談会の件数	1	7	8
学会役員・委員件数	7	7	9
技術相談の実施件数	156	197	95
技術指導の実施件数	23	4	1
講師等派遣の実施件数	9	15	7
技術審査の実施件数	1	0	2
研修会・講習会の開催件数	4	10	9
同参加人数	196	689	465
研修者の受入人数	55	39	40
道関係部との連絡会議等の開催件数	3	5	13
市町村との意見交換等の開催件数	1	1	0
関係団体との意見交換等の開催件数	0	2	13

事 項	件数等		
	H31	H30	H29
道民意見把握調査の回答数	216	388	286
出前授業の実施件数	1	0	0
国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ件数）	0	0	0
国内研修Ⅰの派遣件数	0	0	0
国内研修Ⅱの派遣件数	0	5	2
道民向けイベントの開催件数	3	1	1
同参加人数	228	233	220
国際協力事業等への協力件数	6	3	3
同参加人数	88	23	27
災害等に関係した技術指導件数	0	0	0
災害等に関係した委員派遣人数	0	0	0
ホームページ発信・更新件数	9	14	11
メールマガジン発信件数	0	0	0
フェイスブック発信件数	0	0	0
その他電子媒体発信件数	0	0	0
職場研修実施件数	8	3	7
グリーン購入の金額（千円）	1,489	3,597	925
視察・見学者の受入件数	25	18	32
同人数	392	325	493

ISSN 1346-7506

平成31（令和元）年度（2019）

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター年報

令和2年7月 発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

〒 073-0026 北海道滝川市東滝川735番地

Tel. 0125-28-2800(代表・総務課)

Tel. 0125-28-2291(花き野菜グループ)

Tel. 0125-28-2292(生産環境グループ病虫)

Tel. 0125-28-2293(生産環境グループ栽培環境)

Tel. 0125-28-2211(技術研修グループ)

Tel. 0125-28-2212(技術普及室)

Fax. 0125-28-2165 (総務課)

Fax. 0125-28-2299 (研究部、技術普及室)
